

稱讚 二五八号

二〇二四年六月十日発行

みだ みょうごう
弥陀の名号 となへつつ

しんじん
信心まことに うるひとは

おくねん しん
憶念の心 つねにして

ぶつとんほう
仏恩報ずる おもひあり

『浄土和讃』

弥陀の名号である、南無阿弥陀仏を称えつつ、
眞実信心をえている人は、如来の本願を憶念する
心が常にあり、仏恩報謝の思いから、自然に
念仏が称えられるのです。

(黒田覚忍『浄土和讃』本願寺出版社
一九九七年)

親鸞聖人は、浄土を知るための前提として
まず大切なのは、信心と報謝であると
説いているのです。

(今田雅晴『親鸞聖人の一生』より)



発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒112-10075

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

去る六月一日(土)午後一時三〇分より、
「東組 親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗
八〇〇年 慶讃法要」が東組永稱寺様で、
導師 和久照隆氏(永稱寺)住職のもと執り
行われました。

総勢、八〇名ほどのご参拝がございました。
稱讚寺から、高橋さん、安達さん、住職の姉が
参拝させて頂きました。組内ご寺院からもそ
れぞれ、三人以上のご門徒さまがご参拝でし
た。

法要前に、東京教区教務所長より、この法要
を厳修するにあたってのご本山・本願寺よりの
達書伝達があり、東組新組長 鈴木康正氏よ
りご挨拶がございました。

稱讚寺住職は、結衆として、内陣出勤させて
いただき、一堂で、「新制 御本典作法」(古譜
正信偈 十一句念仏 願以此功德で始まる回
向句)のおつとめを致しました。稱讚寺でも数
回この御本典作法の正信偈を練習しました。

法要に引き続き、記念講座がございました。
ご講師は、今田雅晴先生(筑波大学名誉教授)でした。

今田先生は、歴史学者なのですが、筑波大学に赴任されたことで、その地が、親鸞聖人が二十年間の関東在住の拠点であった稲田の草庵に近いということもあって、親鸞聖人の歩みを歴史的に研究すると同時にみ教えを学ばれるようになったそうです。



カイ

ロ大学 アドバイスを受けておられたそうです。しかし、客員教授として、先生は、仏教には、「縁」ということがありますが、まずと最初の講義でお話したら、一部の学生が、「縁」というのは無いと食いついてきたそうです。何遍も説明したそうですが聞き入れてくれなかったそうです。ご存知の通り、カイロ大学は、エジプトです。宗教と言えば、イスラム教徒の方々が多いところですよ。

外で講 義する とき
そこで、今田先生は、次の講義では、親鸞聖人の「悪人正機」や「報恩」「報謝」のお話をされたそうです。

は、宗 教の話
そうしたら、前回批判していた学生も含めて先生のお話に頷くように聴いていたそうです。をしながら、そういう経験をして、仏教の話をするより、親鸞聖人の話をするので、世界中に広められるのではないかとお考えになられたそうです。



先生ご自身は、専門である歴史学の観点から、日本中に、また世界中に、親鸞聖人のお導きを伝えたいと力強く仰っておられました。

この度、ご聴聞なされた門信徒の皆さまも、今井先生の親鸞聖人の歴史学からのお話に加えて、「世界中に、親鸞聖人の教えが伝えられる可能性が高い」と受け止められ、力強く感じられたことと思いますし、ますます自らが聴聞していかうと決心なさっておられるように、お帰りの満ちあふれたみなさんのお顔を拝見して思ったことでした。



このご法要では、先生の著書の『親鸞聖人の歩み』を記念品としてお読みになりました。お読みになりたい方は、稱讃寺にお問い合わせてください。

特集 金子大榮師の『領解』⑤

「往生と成仏」⑤

第三講として「往生のころ」についてお話したいと思っております。このことを二方面から考えてみたいと思っております。

その一つは消極的な面、あるいは来世拒否の立場とでもいいます。来世というものを拒むという面から往生を考えてみたいと思っております。

来世を拒むという考えにもいろいろありまして、まず第一に考えられることは、釈尊のお気持ちであります。原始仏教というものには、今日研究者も多いのですが、どこまでが釈尊の直説であるかということも甚だむずかしいことです。ただ私共が、これが原始的なものであるといわれている阿含経等を読んでみますと、とにかく釈尊の思想においては、生死解脱の法というのが大切なことでありまして、それを求めて修行すれば、今生において涅槃に入ることができると、涅槃は寂滅であって、ある意味において死と考えてもよいでしょう。死は暗く感じられていますが、その暗い死を逆に明るく希望的に感じる寂滅涅槃という言葉が、一印度全体でもそうでしょう。原始仏教聖典の上においては非常に親しみの多い言葉であったでしょう。仏弟子達が修行して、なすべきことはなし、行

ずべきは行じて、また後の有を受けずという言葉があります。後の有は後の存在、即ち後の世であります。もうこれで後の世を受けるといふことがなくなりたいというところが釈尊のお心であったように思われます。だから、後生というものはないということではなかったのでありましょう。後の世はあっても、それは迷いの連続にすぎないのであります。あるいはよいことをしたものは天界に生まれるとかいうようなことも一釈尊が説かれたかどうかはわかりませんが一善因善果、悪因悪果といってみても結局迷いの続きにしか過ぎないのです。後の世というものがあっても、それはさつとりの道ではなく、有難くないものであります。だから後の世もまよいをしつづけることにはなるのでありますから、願うべきものではないというのが釈尊のお説のように思われます。だからそれは後の世の存在を認めないわけではないんですが、それを拒んで受けたいというところに仏法があるのであります。このお考えが、ずつと親鸞聖人の上にまで確かに見ることができるのであります。

信の巻に、横超断四流の解釈があまりありません。信巻の末巻は成就の文のご解釈にほかならぬということができませんが、「聞其名号信心歓喜」の心を説かれたのが、最初の「一念というは斯れ信樂開發の時剋之極促を顕し、廣大難思の慶心を彰す」というころから、「現生十種の益」を並べられたあの辺までは、大体「聞其名号信心歓喜」のお心でしょう。そして「即得往生」という言葉の解釈が「横超断四流」であり、「住不退転」という言葉の説明が「真の仏弟子」章であります。そして「唯除五逆誹謗正法」の解釈が阿闍世王の物語になってい

ただそこで念を押しておきたいことは、その現在安住とはどんなことであり、あるいはまた、経験とはどんなことであろうかということであります。

後の世を求むる心があつて、それによつて始めて、現在安住ができる、私達はそういうふうに思つていますが、しかし、経験しないからわからないと仰る、その場合には、経験とは何であるかを、問題にしてみましたのであります。これは後でもう一度考えてみましょう。

先生のことを言い出したのは、先生の書物を読みますと、何か、冷やかに、冷静に、理性的にものを考えておられるようであります。それで私達が読んで、もう一つもの足りないという感じがするのでありますが、曾我先生のお話を聞くと、清沢先生は非常に冷静なようにみえるけれども、実は非常に感情的な人であつたといわれます。そういうられるとわかります。つまり感情が高ければ、冷静にする必要があるのです。

感情というものは血液であります。人間の知識は頭にあり、意思は腹に、感情は胸にありといわれております。胸に手をあてて考えるといふことは、それをいつたのではないでしようかこのように知情意の宿る場所を頭胸腹ということができませんが、もう一ついえば感情は血であり、血の製造元は胸でありますから、胸に手をあてて考えるといつたのかも知れませんが、もう一ついうなら、それは血液であります。A型B型とかいいますが、実際は全部の人の血液型が異なるというのが本当であると、ある医者が話してくださいました。

その血の上に個性もあります。その感情が高

ければ高血圧であり、なければ低血圧であります。私などは、何かと冷い人間であるといわれたこともあるし、自分にもそう思ったこともあるのです。冷い人間は暖める必要があります、熱い人間は冷ます必要があります。あるいは、清沢先生のように、熱情があるために、それだけ冷ややかにものをいうということに苦労されたのであるかも知れません。

そういえば、あの「我が信念」にも、有難いという感激は確かに純粹な感情であつて、感情を鈍化したものに違ひないのであります。しかし、感情のとぼしいものは、もし感情がほしい。そしてそれによつて暖められたいと思うのでしよう。確かに感情が豊かで、純粹であれかしとねがう私にとりましては、やはり宗教の世界は感情の世界であるということをおぼせられるのであります。

つい一週間前でありましたが、文部省で天野貞祐博士を介して、宗教的情操教育という案ができるというので、皆が期待しておられるといふことでもあります。私も待つてゐる一人であります。しかし、宗教的情操の涵養というようなことは、明治時代から一度も二度もいわれたことがありますが、何時でもでてくるのは、一派に偏してはならぬということであり、一派に反対がでてくるのであります。私はどちらからかという、一宗一派に偏すると困るといふ気持ちもわかるように思ひます。感情に操を持つということが情操であります。情操という言葉の中には芸術も入ってくるのかも知れませぬが、情操の文字を用いたら宗教的という字はいらないんじゃないかと思ふんです。情操教育といふことを本當にしようとすれば、私達には真

宗の教え、本願を信じ、念仏を申すということが、それが情操を昂揚することであります。一宗一派に偏して差支えないのであります。しかし、一宗一派に偏することになれば、その情操の教育ができるのでありましようか。真宗に任せておきなさい、情操教育ができますからといふところまで宗門の人に自信がもてるのでありましようか。一宗一派に偏するのであれば各々が情操よりも、依然として知識—宗義学—をふりかざすのではないでしようか。知識でない、知識でないといひながら、宗義学にとどこおつてゐるのではないでしようか。だから私は宗教的情操教育といふことをいふ人に対して、情操ですよ、と念を押したいんです。宗教とはこういうものでしようといふことはもう聞きたくはないのです。沢山書物を読んで知つていますから。ただ、それを読んで、なるほどさうであるかとうなづくような本であれかしと思ふのであります。天野さんの本が出たらば、どうか開いてみて、お念仏のであるような本であつてほしいと待つております。

仏教的な「尊厳」の解釈④

『生死の仏教学「人間の尊厳」とその応用』

木村文輝氏著

(四) 過去と未来を包む自己

人間は周囲の人々とのつながりの中で、相互に影響を与え合う縁起の理法にしたがつて生きてゐる。このことを、本節の(二)ではアイデンティティの形成を例にとつて考察した。その結果、自分のアイデンティティは決して固定的なものではなく、他者との関係性の中で常に変

化し続けることが明らかになった。いわば、アイデンティティは自分をとりまく同時代の環境から多大な影響を受けているのである。

だが、アイデンティティが形成される際には自分が経験した過去の様々な出来事からも影響を受けている。しかも、過去における自分は、それぞれの時代の中で、自分を取り巻く環境や周囲の人々との関係の中で生きていた。つまり現在の自分のアイデンティティは、過去の自分の経歴と、その間に触れ合った多くの人々とのつながりの蓄積によって成り立っているのである。

同時に、現在の自分のアイデンティティは、将来の自分が進むべき道を決定づける要因となっていく。のみならず、現在の自分のありようや、それを土台として生きる未来の自分のありようが、周囲の人々や社会の将来にも影響を及ぼすことになる。いわば、現在の自分は様々な周囲との関わりを背負った過去の自分と、様々な周囲との関わりを背負う未来の自分とともに抱えながら、常にそのありようを変化させていく動的な存在である。浜野研三氏はそれを「物語を紡ぐ存在としての人間」と表現し、そのような人間把握は「なによりも複雑な人間の生の全体をその複雑さを自覚的に理解し考察することを促す」ものだと論じている。

さて、このような人間理解の視点から、実は「人間の尊厳」に関するもう一つの理解を導くことが可能である。しかも、そのような人間把握の方法は、既に古くから仏教、とりわけ禅の立場で行われてきたものである。そのことを明らかにするために、ここでは道元の『正法眼蔵』「現成公案」に記されている次の一節を考

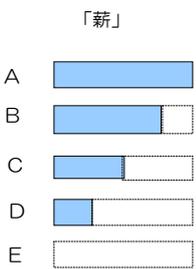
察することにしよう。「たき木、はいとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位ありて、のちあり、さきあり。かのたき木、はいとならぬのち、さらにたき木とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり、このゆえに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり、このゆえに不滅といふ。生も一時のくらいなり。死も一時のくらいなり。」

道元はここで、生きている人間が死にゆくことを、薪が燃えて灰になるという現象に譬えて説明する。彼はまず始めに、そのような現象が日常的に認められることと、反対に、灰が再び薪に戻ることはあり得ないことを示している。だがその次に、彼は「灰はのち、薪はさきと見取すべからず」と説く。つまり、薪が灰に「変化する」という世間的な理解は真理とは異なるというのである。彼のこの主張は、明らかに過去から未来へ流れ行く日常的な時間概念を超えている。そして、彼の説く真理とは、「薪は薪の法位」、「灰は灰の法位」に「住して」、それぞれ「さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際断せり」というものである。これはいかなる内容を表しているのであろうか。

「薪は薪の法位」という時、前者の「薪」はこれから火をつけて燃やそうとしている木切れのことである。この木切れは、火をつけられれば「薪」と呼ばれるのは、諸条件が重なることに

よって、偶然薪として燃やされることになったからにすぎない。それ故、この木切れを「薪」と呼ぶのは、この場における仮の名付けにすぎない。一方、後者の「薪」は具体的な対象物を指示する語ではなく、火をつけるための燃料という状態を表している。それ故、「薪の法位」という語は「諸条件によって生ずる薪としての状態、あり方」という意味を表しており、「薪は薪の法位に住し」というのは、「仮に『薪』と呼ばれている木切れは、今、諸条件によって火をつけるための燃料（薪）という状態にある」ということを示している。「灰は灰の法位にありて」という箇所も同じように解釈できる。

では、この「薪」と「灰」がどのような関係になるのか。薪が燃えて次第に灰に変わっていく様子を模式的に図に表してみよう。この図の中のAとEが、それぞれ上記に解説した「薪」や「灰」に相当する。一方、Cの状態の「モノ」はAやBと比較すれば「灰」と呼ばれ、DやEと比較すれば「薪」と呼ばれる。つまり、AやEの場合と同じように、この場合にも「薪」や「灰」という語は便宜的なものであり実際にそこにあるのは「薪」とか「灰」という名前とは無関係の「モノ」にすぎないのである。しかも、その「モノ」はCの状態に一瞬たるとも止まっていられない。「さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際断せり」というように、常に過去の状態から未来の状態へと移ろい行くのである。現在はその接点にすぎない。写真で撮影されるような固定的



な「現在」としてのCの状態は、現実にはあり得ないのである。Cの状態にある「モノ」を通して明らかにされるのである。

ただし当然のことながら、現象としてのC、一瞬たりとも止まることのない動的なCの状態を、我々は日常的に経験している。そして、このCの状態は、過ぎ去ったAやBを必ず前提とし、同時に、これから起こるであろうDやEを必然的に予定することによってのみ成り立っている。つまり、Cは過去と未来によって同時に支えられるという、縁起の理法にもとづいてしか成立し得ないのである。さらに言い換えればCの中には完了態としてのAやBと、可能態としてのDやEが内包されている。それ故、Cは固定的な瞬間としてではなく、過去と未来に支えられ、同時にそれらを内包する止まらざる「現在」という意味で「永遠の今」とも呼ばれるのである。

だが、それだけではない。Cを支え、Cに内包されているAやBの背後には、「薪」のもとになった木や、木を育んだ土や空気、木から「薪」を切り出した人間、さらには、そうした様々なものに直接的、間接的に関わっている全世界のあらゆるものが縁起の理法によって連なっている。しかも、同様のことはDやEにもあてはまる。その結果、Cの中には過去から未来にわたる全世界のあらゆるものが、相互に関連し合いながら含まれていることになる。このことは同時に、過去、現在、未来のありとあらゆる世界を結ぶ縁起の網の目の中心にCが位置していることをも意味している。つまり、Cは縁起によって一切を内包するとともに、一切の理法にもとづく一即一切、一切即一の真理が

「モノ」を通して明らかにされるのである。

さて、引用文の後半では、このような「薪」と「灰」の関係が、そのまま人間の生と死にあてはめられている。そして、ここにこそ「人間の尊厳」のもう一つの意味が存在する。つまり「生」と呼ばれる状態も、「死」と呼ばれる状態も、止まることのない人間の「一時のくらし」、すなわち、一瞬のあり方に過ぎない。けれども、それぞれの瞬間における一人の人間の歴史、さらには、その人間を取り巻く社会や周囲の人々、のみならず、そうした様々なものに直接的、間接的に関わる全世界のあらゆるものが内包されている。同時に、それぞれの瞬間における一人の人間は、過去から未来にわたって全世界を結ぶ縁起の網の中心、より端的に言えば、時空を超えた世界の中心に位置していることになるのである。

このような意味での「人間の尊厳」を、蒲田茂雄氏は次のように説明している。「どんな人間にも人間である限り、絶対の尊厳性がなければならぬ。・・・それぞれの個人の存在は、個人のみで存在しているのではなく、無限のひろがりをもっているのだ。何らかのおかけをうけてわたしたちは生かされている。それは愛の関係網といってもよい。個物が互いに融通し、互いに浸透し、互いに関連して、しかも互いにさまたげることがない世界こそ仏教のめざした世界像である。それを表現させるには、互いに人間を尊重しつつ、同自行をおこなう、愛語の実践につとむべきである。」

「宿善」と「宿業」

二〇二四年六月八日、「がん患者・家族語らいの会」で住職が話しましたことについて、数回に分けて、掲載いたします

身と心(体と感情)を持つ私たちは「業」を生きています。

「業」と聞くと、「自業自得」「業が深い」「業を煮やす」「業を背負う」「生業」の意で使用していることがあります。

「業」を平たく言えば、私自身の「行い」「行為」を言います。仏教用語としては、身口意の三業と言います。

お釈迦様の時代よりもずっと昔からインド社会では、「業」の考え方がありました。

「善因楽果」、「悪因苦果」と、善い事をしたら好ましい結果を得る、悪い事したら好ましくない結果になる。そこに輪廻転生という思想が加わりました。

人は、自分の業の報いを受けて、生まれ変わりに死に変わるといふ生命観です。それまでは、王様は、好き勝手に人を罰したり、殺したりできましたが、この「業報輪廻」の思想が確立すると、行為の報いによって生まれ変わり死に変わるのですから、王様といえども、好き勝手に出来なくなりました。現在、王様でありえるのは、前世で人の上に立つような偉業、善業を積んできたからということです。善い事をすれば幸せな世界に生まれ変わり、悪い事をすれば、不幸な世界に落ちてしまうというのは、倫理道徳を定着させていくことになり、業報による転生が一般的に認識されるようになりました

稱讚寺六月行事予定

1日(土) 東組 13時より
親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要
会所 永稱寺



16日(日) 午後2時 のんのん法話会
兼 永代経法要

晴れの日もよし 雨もよし
ほとけ じんま なあ
いらも仏の慈悲中

二〇二四年「心のともしび」六月カレンダーより

『歎異抄』第五条にも「一切の有情は、みなもつと世々生々の父母・兄弟なり」とありますが、この「世々生々」を「生まれ変わり死に変わり」と殆どの解説書には説明されていて、ずつと疑問に思っているところですが、

死んだら行為によって輪廻転生し続けるという事は、何が転生するのかということになります。そこで想定されたのが、アートマン(我)というものです。善悪の行いという業の報いを次の生まで持って行ってくれる、この肉体が生まれ変わり死に変わりしても、不変の存在となるものです。日本の「靈魂」とは違うようでありすが。

しかし、転生するのは、人間界とは限らないのです。上は天界、下は地獄なわけです。善い事をして天界に生まれたとしても、しよせんは迷いの世界です。いつまで経っても解脱・悟りを得ないのです。そこでまた想定されたのがブラフマンです。ブラフマンは、姿形はありません。キリスト教の神のように人格がありません。宇宙全体を意味する絶対的存在、絶対的な真理だと言われます。

一人ひとりの中にあるアートマンが、その絶対的存在であるブラフマンと一体になることによって、アートマンは、ブラフマンの中に帰一する。「梵我一如」という思想が生まれました。それによってアートマンは輪廻転生の世界から解放されていくというのがバラモン教です。でも、これはバラモンの修行者だけの特権だったのかと思います。

一般民衆には、不変のアートマンがあったとしても、輪廻転生を続ける。全てが、三世(前世・現世・未来世)にわたっての「因果応報」

と捉えられていた。常識化していたのです。

今、この現世において差別を強いられる者は、前世でそれそうおうの悪業をしたから、現在いくら善業を積んだとしても所詮は迷いの世界に生まれるのであり、いつまでも解脱できないでいるわけです。(「業」は只、善悪だけではありません。何を生業にしているかというのが重要であったのではないかと思えます。)そこに、「梵我一如」を否定する沙門が現れます。その一人がお釈迦様です。

『涅槃経』に六師外道が出て参ります。この六人もバラモン教の教えを否定した方々です。「外道」というのは、仏教以外の教えという意味です。「師」は先生の意ですから、お釈迦様が沙門時代に覚りを得るにあたって、影響を与えた沙門だったのでしょう。

ジャイナ教も六師外道の一つです。仏教の「不殺生」の教えは、このジャイナ教の「不殺生」の考えの影響を受けたと言われております。

お釈迦様は、バラモン教の教え「梵我一如」、業の考え方を否定しました。アートマンという不変の我を否定したのです。

それが、「縁起の法」です。全ては「縁起」起こっている状態であり、不変の我というものはないんだ。「無我」なのだ。原因があつて、結果があるのではない。「因果応報」を否定するところに、お釈迦様独自の「業」を説かれていかれました。

※私たちはいつの間にか「因果応報」「輪廻転生」が仏教の教えと捉えているようであります。それを払拭出来ればと思うのですが、次号に続きます。